

山岡鉄舟

NHK 大河ドラマ「軍師官兵衛」が終盤を迎えている。朝鮮出兵のエピソードなど初めて知ることも多く、改めて歴史の面白さを堪能している。来る 2015 年は徳川家康没後 400 年。駿府城天守閣再建の動きもはじまったところだ。こちらは応援団が揃っているようなので、今回は旧幕臣で静岡藩権大参事も務めた山岡鉄舟を紹介したい。

「晴れてよし 曇りてもよし 富士の山 もとの姿は 変わらざりけり」

鉄舟は号。通称は鉄太郎。いわゆる「幕末の三舟」のひとりだ（ほか、勝海舟、高橋泥舟）。一刀正伝無刀流（無刀流）の開祖。官僚であるが、同時に剣や書の達人として知られる。弱冠 15 歳の時に「修身二十則」という自らへの誓いを立て、生涯守り通した。しかし、それだけではない。実は、もしこの人がいなければ、幕末の日本、ひいてはその後の日本が全く違ったものになっていたかもしれないのだ。

「江戸城無血開城」。教科書などでは、西郷隆盛と勝海舟の会見は絵入りで紹介されることもあり、徳川家を救い、また江戸の町を戦火から救ったのはこの二人の会見があつてのことだと思っている人が多い。しかし、実はその前に、鉄舟の決死の活躍があつたということをご存知であろうか？

鉄舟は勝と諮って官軍の中を単身本営まで抜けて行き、駿河にいた西郷と会った。そこで鉄舟は慶喜の本心を誠心誠意訴え、ついにその意を汲んだ西郷は「倒幕の戦いを決行し將軍を武力で倒す」という計画を中止する決意をしたという。西郷を説得したからこそその「江戸城無血開城」であつた。

西郷の鉄舟への評価が次である。「生命もいらぬ、名もいらぬ、金もいらぬ、といった始末に困る人だが、ただしあんな始末に困る人なら、お互いに腹を開けて、共に天下の大事を誓い合することができる。本当に無我無私の忠胆なる人とは、山岡さんのような人だ」。遅ればせながら山岡鉄舟を最も見習うべきは今の政治家かもしれない。

ところで、清水区にある鉄舟寺はその名の通り鉄舟が復興したものだ。鉄舟寺の前身は飛鳥時代藤原氏の出身である久能忠仁が久能山東照宮付近に建立した堂に始まり、その後奈良時代の僧行基が来山して久能寺となった。1570 年（永禄 13 年）武田信玄が久能山に城を作る（久能城）ため現在地に移されたが、江戸時代後期あたりから衰退し、明治に入ると無住（住職がいないこと）になって寺は荒廃してしまった。これを鉄舟が自力で復興したのである。

私たち近くに貴重な歴史が埋もれたままになっている。まちの歴史はまちの命だと思う。市民が中心となって歴史を掘り下げ、磨き上げることで地域の活力は甦ると思う。例えば毎年開催される「清水みなと祭り 次郎長道中」。次郎長に最も影響を与えた人物は誰かと聞かれれば、10 人のうち 10 人までが山岡鉄舟と答えるだろう。次郎長は鉄舟を親分と慕っていた。私は「鉄舟と次郎長まつり」にしたらもっとすそ野が広がっておもしろいと思う。

※ 南條範夫作「山岡鉄舟」がおもしろい。静岡新聞に連載されていただけあって、当時の静岡県のことがよくわかる。清水次郎長も登場するし、是非お読みいただきたい！

静岡県議会議員
天の一